

學小  
軍歌集

附幼稚園唱歌集

特100

580

5  
125

0m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10m 11 12 13 14 15 16m 17 18 19 20m 21 22 23 24 25

始





特100

580

# 學小軍歌集

附幼稚園唱歌集

軍神橋中佐  
 高等學校西家歌  
 道八兵百八十里  
 ホーミングデン夜襲  
 廣瀬中佐  
 战友  
 白虎隊  
 函嶺の山  
 千利岩  
 海軍マリーチ  
 附幼稚園唱歌

~~5  
 125~~



特100

580



學小

軍

歌

集

全

秀

英

堂



大正

1.10.2

丙交



(1)

集歌軍學小

學小軍歌集目次

第一	橘中佐……………一
第二	凱旋……………一九
第三	道は六百八十里……………二六
第三	高等學校西寮歌……………三六
第三	春爛漫の花の色……………三六
第四	ホーヘンリンドン夜襲……………四二
第四	日は西に入相の……………四二
第五	廣瀬中佐……………五二
第五	神州男子數あれど……………五二
第六	戰友……………五八
第六	此處は御國を何百里……………五八



第七	白虎隊	霞の如くみだれくる	六七
第八	箱根の山	箱根の山は天下の嶮	七一
第九	千引の岩	千引の岩は重ならず	七五
第十	海軍マーチ	守るも攻るもくろがれの	七六

學小軍歌集目次終

錄附幼稚園唱歌集目次

桃太郎	桃から産れた桃太郎	一
毬	柳の木蔭に毬遊び	二
舌切雀	糊をなめたる	三
凧	風よ吹け	四
猿蟹	早く茅を出せ	四
梅	咲いたよ咲いた	五



お	雛様	.....	六
	上のだんには	.....	
大	寒小寒	.....	六
	大寒小寒	.....	
行	軍	.....	七
	見よく兵士の行軍	.....	
雞	コケ、コココ	.....	七
愉	快	.....	八
	晴れたる朝も雨ふる暮も	.....	
か	ぞへ歌	.....	九
	一つこや	.....	
花	咲爺	.....	一一
	裏の畑で。ホチが鳴く	.....	

鳩	ボツボ	.....	一三
	鳩ボツボく	.....	
辨	慶	.....	一四
	天下の名器に逢はばや	.....	
達	磨	.....	一
	なげたさて	.....	
兎	.....	.....	一六
	兎々々さん	.....	
大	江山	.....	一七
	むかし丹波の大江山	.....	
森	の樂隊	.....	一八
	霞たな引き花咲きて	.....	
牛	若丸	.....	一九
	父はなわりの	.....	



笛と太鼓……………10

けふは、うれしい日よう日

虫の樂隊……………11

千草八千草

大黒様……………13

大きな袋を肩にかけ

ポチとタマ……………14

此子は「ポチ」を申します

星……………14

御日様

樂隊遊び……………15

拍手を揃へて

ほうほけきよ……………16

小さい子く

白よ來い……………16

白よ來い

夕立……………17

ごろく

浦島太郎……………17

むかしく

御月様……………19

おつきさま

風車……………20

まわるく

兎と龜……………20

もしく龜よ

附錄 幼稚園唱歌集目次終



軍神橋中佐

上ノ一

遼陽城頭夜は更けて  
有明月の影すごく  
霧立ちこむる高梁の  
中なる塹壕聲絶えて  
目醒め勝なる敵兵の  
膽驚かす秋の風



二

我精銳の三軍を  
陽撃せんと殊勝にも  
思ひ定めし敵將が  
集めし兵は二十萬  
防禦至らぬ隈もなく  
決戦すこそ聞へたる  
時は八月末つかた

三

四

我籌畧は定まりて  
總攻撃の命下り  
三軍の意氣天をつく  
敗殘の將いかでかは  
正義に敵する勇あらん  
敵の陣地の中堅ぞ  
先づ首山堡のりとれこ



三十日の夜深く  
前進命今忽ちに  
下る三十四聯隊  
橘大隊一線に  
みなぎる水は千尋の  
谷に決する勢か  
岩を碎く狂瀾の

六、

躍るに似たる大隊は  
東雲はるゝ明けの空  
敵壘近く攻め寄せぬ  
かくと覺りし敵壘の  
射注ぐ玉は烈しくて  
全線あまた倒るれば  
隊長怒髪天をつく



七  
豫備隊續けと刀をふり  
獅子奮迅こはせ上る  
劍戟磨して敵火散る  
敵の一線先づ破れ  
隊長咆哮躍進し  
卒先塹壕とび越へて  
閃電敵に切り込めば

八  
續く決死の數百名  
敵頑強に防ぎしも  
遂に堡壘を奪ひ取り  
万歳聲裡日の御旗  
朝日に高く翻し  
刀を拭ふ暇もなく  
彼れ逆襲の関の聲



九、

十字の砲火雨の如  
寄るべき地物更になく  
此惨状に篠つけば  
一瞬變轉アゝ悲惨  
伏屍壘々山をなし  
鮮血洋々谷にみつ  
折しも咽を打ちぬれ

十、

倒れし少尉川村を  
隊長自ら提げて  
壕の木蔭に繃帯し  
再び向ふ修羅の道  
あゝ鬼なるか神なるか  
十一、  
銘刀關の兼光が  
鐔を碎きて、  
彈丸は



腕かひなをけづり更さらに又また  
續つづいて打うち込こむ四よつの玉たま  
血ち烟けかりさつと登のぼれども  
隊たい長ちやう更さらに驚おどろあす  
十二、嚴げん然ぜんとして立たち上のほり  
尙なほ我わが兵へいを勵はげまして  
雌し雄ゆうを決けつする時ときなるぞ

十三、此この地ちを敵てきに奪うばはるな  
疾こく打うち拂はらへ此この敵てきを  
天てんに轟とろろく下げ知ちの聲こゑ  
衆しゆうをたのめ敵てき兵へいが  
雄をたけび狂くるふ我わが兵へいに  
突つき入いり兼かねて色いろ動うごく  
浮うき足あし立たちし一いつ刹せつ那な



十四、  
 爆然敵の砲弾は  
 碎ける頭上に雷のごと  
 邊の兵にあひせつゝ  
 丸はあられどたばしれば  
 打ち倒されし隊長は  
 無禮な奴ご力こめ  
 立たんごすれば口惜しや

十五、  
 腰は破片に碎かれぬ  
 隊長傷は浅からず  
 暫し茲にと軍曹が  
 壕に運びていたわるを  
 否見よ内田浅きづと  
 絨衣をぬけば紅の  
 血汐は流れて迸る



十六、中佐は更に驚かず  
 隊長我は茲にあり  
 受たたる傷は深からず  
 日本男兒の名を思ひ  
 命の限り防げよと  
 部下を勵ます聲高し  
 寄せては返し又寄する

十八、敵の新手を幾度か  
 打ち返せしも如何にせん  
 味方の残兵少きに  
 中佐は更に命ずらく  
 軍曹銃をとりて立て  
 軍曹やがて立ち上り  
 辛くも敵を拂へども



防き守らん兵なくて  
此地を占めん事難し  
後援來るそれまでと  
中佐を負ひて下りけり  
屍ふみ分け壕をとび  
双を杖に岩を越し  
漸く下る折も折

十九、  
虚空を摩して一弾は  
またも中佐を貫きさて  
内田の胸を貫けり  
下ノ一、あゝ悲惨の極  
伏し合ひ抱く如くにて  
共に倒れし將士が  
山川振ふ勝関に



二、  
 意氣吹き返し見返れば  
 山上己に敵の有  
 こび来る玉の繁ければ  
 暫し此所に軍曹が  
 無念の涙拂ひつゝ  
 中佐を負ふて山陰に  
 辿り出でたる松林

三、

僅かに残る我味方  
 阿修羅の如き軍神も  
 風發叱咤今絶えて  
 血に染む眼打ち開き  
 日出る國の雲千里  
 千代田の城を伏し拜み  
 中佐畏み奏すらく



四、

周太が曾て奉仕せし  
儲けの君の畏くも  
生れ給ひしよき此の日  
逆襲うけて遺憾にも  
將卒あまた失ひし  
罪は如何でか逃るべき  
さわさり乍ら武夫の

五、

取り佩く太刀は思ふ様  
敵の血汐に染めてけり  
臣が武運はめでたくて  
只今茲に戦死すこ  
言々悲痛聲凜々  
中佐は更に省みて  
我戦況は今如何に

六、



七、  
 聯隊長は無事なるか  
 首山堡已に手に入りて  
 關谷大佐は討死と  
 きくも語るも血の涙  
 我勝鬨の聲かすか  
 邊に砲の音絶ねて  
 夕陽遠く山に落ち

八、  
 天籟寂寞まれは  
 暗のそばりに包まれて  
 あたりは暗し小松原  
 負ひし痛手の深ければ  
 情け手厚き軍曹の  
 心盡しも甲斐なくて  
 英魂此所に止まらず



九、

中佐は過去を省みて  
 臨終の笑をもらしけり  
 朝な夕なに畏くも  
 打ち誦したる大君の  
 詔のまゝに身を捧げ  
 高き尊き聖音に  
 報ひまつりし隊長の

十、

いまはの床に露寒し  
 君身を持して嚴なれば  
 舉動に規矩も失はず  
 職を奉じて忠なれば  
 功績常に衆を抜く  
 君交りて信なれば  
 人は鑑と敬まひぬ



十一、忠魂義膽才秀で

勤勉克苦學勝れ

情は厚き勇を兼ね

花も實もある武士の

君の臨終の言葉も

千歳誰か泣かざらん

十二、花潔ぎよく散りはて

護國の鬼と誓ひてし

君軍神と祭られぬ

忠魂義膽後の世に

人の心を勵まして

武運は永久つきざらん

十三、國史傳ふる幾千年

此所に征露の師を起し



文ふみ繙ひらきて見みる毎ごとに  
 我わが日ひの本もとの國くに民たみよ  
 花はな橘たちばなの香かほりには  
 忍しのべ軍ぐん神じん中ちゆう佐さをば  
 道みちは六む百ひゃく八はち十じゅう里り  
 長なが門かどの浦うらを船ふね出でして

第十九道は六百(旋凱の歌)

早はやや二ふたとせの故郷ふるさとの  
 山やまを遙はるかに眺ながむれば  
 曇くもり勝かちなる旅たびの空そら  
 晴はらさにやならぬ日本ひのくにの  
 御國みくにの爲ためと思おもひなば  
 露つゆより脆もろき人ひとの身みは  
 茲こゝが命いのちの捨すてごころ



身には彈丸さず劍さず  
負ごもつげぬ赤十字  
猛き味方の勢に  
敵の運命窮りて  
脱ぎし胃を戟の尖  
串てぞ歸る勝利軍  
空の曇りも今日はれて

一層高き富士の山  
峰の白雪消ゆるとも  
勳を建し丈夫の  
名譽は永く竭さざらん

其二

柳櫻をこき交ぜし  
都の春の朝風に



吹き 翻る 日章旗は  
 今日 凱旋の 我軍を  
 欣び 迎ふ 國民の  
 見渡すはるか 彼方より  
 歩兵 騎兵の 肅々と  
 喇叭の 聲の 勇ましく

○

勇む 喇叭の 聲々を  
 聞く 國民は 氣もいさむ  
 いさむ 兵士に 勇む 駒  
 凱歌の 聲も 勇む なり  
 旗も 勇めば 大砲も  
 小砲も 共に 勇む なり  
 いさみくし 兵士や



喇叭らっの聲こゑも勇いさまし、

○

勇いさむ兵へい士しも戦せん場ぢやうに

ありし辛しん苦くは幾いく何げぞ

霰あられふる日ひも雨あめの夜よも

氷こほりの刀やいばくろがねの

火ひ玉たまこびくるそが中なかも

何なにか厭いとはん大おほ君きみの

爲ためと思おもは、いと、なほ

喇叭らっの聲こゑも勇いさまし、

○

あな勇いさましの兵つは士ものや

國くにこ君きみとのそが爲ためぞ

修しゆ羅らの巷ちまたに出しゆつ入にふし



萬死の中に生を得て  
銃と名譽を擔ひつゝ  
歸る都の春景色  
柳櫻もうらゝかに  
喇叭の聲も勇ましゝ

第三、高等學校西寮歌

春爛漫の花の色

紫匂ふ雲間より  
紅深き旭影  
長閑き光さしそへは  
鳥は囀り蝶は舞ひ  
散り來る花も光りあり  
秋玲瓏の夕紅葉  
山の端近くかげろへば



血ち汐しほのいろ色いろのゆう夕ゆう日ひ影かげ  
 丘をかのあか紅葉あかばなにて照てりそ添そへば  
 錦にしき榮はへある心こころ地ちして  
 入いり相あひのかね鐘かね暮くれてゆく  
 夫おれだく濁濁流りゅうにうを魚うを住すまず  
 秀しゅう麗れいのち地ちにけん健けん兒じあり  
 勤きん儉けん尙しやう武ぶのはた旗はたのいろ色いろ

自じ治ち共き同どうのふえ笛ふえのこゑ聲こゑ  
 白しろ雲くもなびくかう向かう陵りやうに  
 籠こもるひさもひさ久ひさしじゅう十じゅう餘ねん年ねん  
 鳴な呼お衰おとろえぬ東とう洋やうの  
 二に千せん餘よ才さいのくん君くん子し國こく國こく  
 銀ぎん鞍あん白はく馬ば革かをてら銜てらひ  
 翠すい袖しゆ玉ぎよく簪さん美びをきそ競きそひ



榮華の夢を貪りて  
文明の華に人酔へり  
港は遠く夜は暗く  
逆捲く怒濤の大洋に  
木の葉の如く漂へる  
舵の緒絶へたる小舟すら  
遙かに見へる明星の

光に行手を定むなり  
自治の光は常闇の  
國をば照す北斗星  
大和島根の人々の  
心の舵を定むなり  
若夫自治のあらずんば  
此の國民を如何にせん



第四、ホーヘンリンデン夜襲

日は早や西に入相の  
鐘はかすかに聞へつゝ  
ホーヘンリンデン村近く  
イーザー河の音高し  
流るゝ水は物凄く  
總て新手の兵士は

新に積る雪のどこ  
よねんも無くぞ臥し居けり  
只聞くものは村遠く  
犬の遠吠する聲ぞ  
夜はいとたけて見ゆる頃  
不意に打ち出す大砲の音  
すは事ありと大將は



墨なす空や冬の夜や  
 やみをば照すあかりをば  
 つけよつけよと命じけり  
 喇叭の聲や炬火の  
 あかりによりて速に  
 整頓したるつはものは  
 玉ちる劔抜つれて

手荒き馬は恐ろしく  
 身の毛もよたつもてなしに  
 あづからんとや勇みたち  
 いとも雄々しく嘶けり  
 名譽に満つる軍馬をば  
 敵の陣地に乗り入るゝ  
 音はさながら雷の



ひらめく如く山岡も  
震ひ起りてぬは玉の  
暗にひらめく大砲は  
千々の電びかくと  
まばゆき迄に輝けり  
秋は紅葉のそれならで  
から紅にまだらなす

ホーヘンリンデン丘の上  
照電はいや明し  
瀧つ瀬をなすイーザーの  
流るゝ水の音高し  
殺伐悲惨の有さまは  
いさ壯烈に見へにけり  
漸くあくる朝ぼらけ



森をはなる、雀色  
喊を作りて突き進む  
猛烈敢死の兩軍は  
眞一文字にあまきろふ  
八重たな雲を押分て  
指し出る旭にますら雄が  
榮譽をこゝに競ひけり

惨たる軍旗なびかせつ  
討てや進めの號令に  
勇み乗り入る輕騎隊  
屍をこゝに曝さんや  
世にも名高き佛軍が  
不意に打たれし口惜さ  
男子と生れし甲斐もなし



いざもろともに身を屠ほり  
流るゝ血ち汐しほに此この恥はぢを  
清きよく注そいでくれんずと  
怒いかり激げきせし武ぶ士しの  
勝しょう利りの程ほども知しられけり  
さしもに強つよき塙おう軍ぐんも  
死しをさわめたる手て負おひ猪じし

如何いか望のぞみを果はたすべき  
却かつて敵てきに逆さか打うたれ  
降ふり積つむ雪ゆきは武ぶ夫ぶの  
屍かばねを纏まとふ衣ころもそや  
踏ふみ轟とどろかせし芝しば草くさの  
永ながく眠ねむらん墓はか所しょなり



第五、廣瀬中佐

神州男子數あれど  
男子の内眞男子  
世界に示す鏡こは  
廣瀬中佐の事ならん  
己に一度死を期して  
旅順封鎖に向ひしが

事意に満たぬ無念さは  
再び結ぶ決死隊  
元より君に捧げし身  
妻も向へず子も持たず  
父の寫眞と兄の文  
是ぞ膚の守りなる  
かゝる驍將上にあ



下に弱卒なぞあらん  
 兵曹杉野就中  
 中佐が無二の股肱たり  
 上下心を一にして  
 入るや虎穴の奥深く  
 其大任は舟底に  
 積める石より尙重し

探海燈は稻妻か  
 水雷我れにいかづちか  
 中をひるまず勇々と  
 入るや何を鬼中佐  
 斯くて任務を果せしが  
 我兵曹は如何にせし  
 姿も見えず影もなし



あわれ杉野は打れしか  
小玉と響く砲彈の  
船に碎くる響のみ  
三度求めて三度見得ず  
斯くては君も危しこ  
促されつゝ本意なくも  
小舟に移り乗らんこす

折しもあれや轟然と  
耳を劈く敵彈は  
血煙舟に立ち込めて  
中佐の姿は早もなし  
五尺の身體の名残りなる  
只一寸の肉塊は  
忠血義血赤血の



千古に朽ちぬ寶ぞや  
あな勇ましの戰神  
七度人に生れ來て  
我が帝國を守るらん  
あな勇ましの戰神

第六、戰友

此處は御國を何百里

離れて遠く滿洲の  
赤い夕日に照されて  
戰友は野末の石の下  
思ひば悲し昨日迄  
眞先かけて突進し  
敵を散々こらしたる  
勇士は此處に眠れるか



嗚呼・戦ひの最中に  
隣りに居りし戦友の  
俄かにはつたさ倒れしを  
吾は思はずかけよりて  
軍律厳しき中なれど  
是が見捨て置れようか  
しつかりせよとだき起し

假紉帯も玉の中  
折から起る突貫に  
戦友はやうく顔を上げ  
御國の爲めだかまはずに  
後れをとるなど目に涙  
後に心は残れども  
残しちあらぬ此のからだ



それじゃ行くよと別れたが  
永の別れになつたのか  
戦すんで日は暮れて  
探しに戻る心では  
何卒生きて居て呉れよ  
物なと云へと願ふたに  
空しく消えし魂は

御國に歸るポケットに  
時計計かりはコチくと  
動いて居るのは情なや  
思へば去年船出して  
御國が見えずなつた時  
玄海灘で手を握り  
名を名乗つたのが始めにて



其れより後は一本の  
煙草も二人で分けてのみ  
着いた手紙を見せあふて  
身の上話しを繰返し  
肩をたゝいて口ぐせに  
せうせ命は無<sup>な</sup>い者よ  
死んだら骨を頼<sup>たの</sup>むよと

云ひかわしたる二人仲  
思ひもよらぬ我一人  
不思議に命長<sup>いのちなが</sup>らえて  
赤い夕日の満洲に  
戦友の塚穴ほらうとは  
くまなく照らす月今宵  
心しみぐ筆とつて



戦友の最後を細々と  
親御へ送る此手紙  
筆の運びはつたないが  
行燈の陰で親達が  
讀るゝ心を思ひやり  
思はず落す一しづく

### 第七、白虎隊

一

霰の如くみだれくる  
敵の彈丸ひきうけて  
命を塵と戦ひし  
三十七の勇少年  
これぞ會津の落城に



其の名聞えし白虎隊

二

味方少く敵多く

日は暮れはて、雨暗し

はやる勇氣はたゆまねど

疲れし身をば如何にせん

倒るゝ屍流るゝ血

頼む矢玉もつきはてぬ

三

残るは僅かに十六士

一度後に立ち歸り

主君の最後に逢はやと

飯盛山によぢのぼり

見れば早くも城落て



焔ほのほは天てんを焦こしたり

四

臣子しんしの務つとめはこれまでと  
いざ屑くずよく死しすべしと  
枕まくらならべてこゝろよく  
刃やいばに伏ふしゝ物語ものがたり  
傳つたへて今いまに義談ぎだんとす

散ちりたる花はなの芳かほしさ

第八、箱根の山

一

箱根はこねの山やまは天下てんかの嶮あせ  
函谷くわんこく關くわんも物ものならず  
萬丈ばんじやうの山やま千仞せんじんの谷たに  
前まへに聳そびへ後うしろにさそふ



雲は山を廻り霧は谷を閉す  
晝尚暗き杉の並木  
羊觴の小徑は苔滑か  
一夫關に當るや萬夫も開べし  
天下に旅する剛毅の武夫  
大刀腰に足駄がけ  
八里の岩も路ならず

斯くこそありしが往時の武士

二

箱根の山は天下の嶮  
蜀の棧道數ならず  
萬丈の山千仞の谷  
前に聳へ後にさそふ  
雲は山を廻り霧は谷を閉す



晝尚暗き杉の並木  
 羊觴の小徑は苔滑か  
 一夫關に當るや萬夫も開べし  
 山路に狩する剛毅の健兒  
 獵銃肩に草鞋がけ  
 八里の岩も踏み破る  
 斯くこそあるなれ當時の健兒

第九、千引の岩

千引の岩は重からず  
 國家に盡す義は重し  
 事ある其日敵ある其日  
 ふりくる矢玉のたゞ中を  
 侵して進みて國の爲  
 盡せや男子の本分を



七十六  
髪一筋も軽からず  
國家に捨る身は輕し  
あらしの枕氷のしこね  
千辛萬苦の世の中を  
凌ぎつこめて君の爲  
捧る男兒の一身を

第十、海軍マーチ(軍艦進行曲)

一  
守るも攻るも黒鐵の  
浮べる城ぞ頼なる  
浮べる其城日の本の  
皇國の四方を守るべし  
眞鐵の其船日の本の  
仇なす國をせめよかし



二

い  
わ  
さ  
の  
煙けむりわ  
た  
つ  
み  
の  
立たつか  
と  
許はかり  
な  
び  
く  
な  
り  
玉たま打うちひ  
び  
き  
は  
雷いかづちの  
聲こゑか  
と  
ば  
か  
り  
ご  
よ  
む  
な  
り  
萬ばん里りの  
波は濤たう乘のり越こえ  
て  
皇み國くにの  
光ひかり  
や  
輝かがやかせ  
終つひり

終